

非惡童物語

手 25

品

ぼくたちは「悪童」ではなかつた。
しかし「善童」でもなかつた。

え・津高和一
足立卷一

ぼくの手もとに、一冊の革表紙の手帳が残つてゐる。
どうやら、小学五年生のころのものらしい。
ページのはじめには、各少年雑誌の投書細則がびつし
り張りこんである。

「少年俱楽部」（講談社）

「不思議之国」（金蘭社）

「日本少年」（実業之日本社）

「少年文壇」（少年文壇社—名古屋市）

「少年世界」（博文館）

「親友」（姫路市材木町、市場春風方、親友詩社）

「中学生」（研究社）

「赤い鳥」（赤い鳥社）

「金の船」（金の船社）

「小学五年生」（小学館）

「群青」（神戸市川西通二丁目四ノ四、大森春治）

「美談」（美談社）

自分ながら、こんな数多くの少年雑誌の投書規定をよ
く集めたものと感心する。五年生のくせに「中学生」と
いうのや同人雑誌だったと思われる「親友」や「群青」
といふのにまで目をつけてゐる。おそらく、このリスト
は大正末年の少年雑誌のほとんどでもあるだろう。
その投書細則の募集種目をみると、「少年俱楽部」で

前号まで 父は二六新報という新聞の同人であったが、ぼくの生後
四ヶ月で急死。母は実家に帰り、祖父母に育てられる。小学一年生
のとき、祖母も死に、祖父につれられて故郷長崎に引きあげたが、
その祖父も急死し、孫児となる。親戚の寺や染物屋で養われていた
が、急に神戸の母の実家へ引き取られ、そこから諫訪山小学校へ通
うことになった。同級のトルさんと友達になり、絵を描いたり、
タルマッチをしたりして、毎日毎日遊んだ。中でも生田神社の森や
おまつりは僕達の好奇心をあおりたてた。また、阪妻に魅せられて
場末の映画館をまわったり、覆面遊びをしたりしたのもこの頃であ
る。このようにしてぼく達の旺盛な好奇心は、遊びや、遊び仲間を
通して日々毎季節毎に新しい経験と知識を与えてくれる。

は、短文、少年詩、和歌、滑稽和歌、童謡、童心句、も
のは付、通信（各地の風俗習慣、本誌への註文、読者と
記者とのお便り何でもよろし）となっており、「不思議
之国」では、これに笑話、頓智問答、冠句、漫画が加わ
り、「日本少年」では少年小説、学校で印象の深かつた
話、書簡文、狂句、話の種、僕の経験、各地不思議くら
べ、珍らしい名前くらべ、僕の好きな歴史の一章、あだ
なくらべ、少年顧問局、クロスワードと多様をきわめて
いる。「小学五年生」では、これに日記、図画、書き方
もある。これに対し、鈴木三重吉が編集して日本の児童
文学史に功績を残した「赤い鳥」では、さすがに綴り方、
自由詩、創作童謡、創作童話、作曲の五種目に限られ、



が、それでも毎月どの雑誌かには掲載され、それを切り抜いて手帳に張っている。図画、ものは付、和歌、童謡といった類だが、いま読めば当然ながらどれも幼稚をきわめ、ここに再発表するわけにはいかない。

ただ、そのなかに「少年手品師」と題する短文が張りつけてあるが、この少年のことはいまもぼくの記憶から消えてはいない。

その短文は「少年文壇」に掲載されたものだったと思うが、つぎのように書きおとしている。

▲ジャンジャンジャン広場の方で鐘が鳴った。それはナンキンの手品師であることは僕等にわかつっていた。▼

この「広場」とは生田神社の東門の前のことである。

その「鐘」とはドラであって、その音はいまもぼくの耳の底で鳴っている。

▲僕等ぐらいの子供が一人、弟らしい七才ぐらいの子供がしきりに鐘をたたいて人を呼んでいる。

鐘はへこみ、バチはカンナのかけてない棒切。水色のよごれた支那服にちびた支那靴。

兄とも思われる十二、三の少年はしきりにしゃべっている。

道具は皆古い。父の使っていたもので、父は死んだかそれとも病気なのだろう。綿の上に赤いさらしをかぶせ、くちたオワンをさかさまにして、一つずつオワンの中に入れて行く▼

どうもまずい子どもの文章で恐縮だが、書いていることは事実なのである。そのころ、手品を見せては金をもらう中国人の子どもの兄弟がいたのだ。手品といつても綿を赤い布でくるんだ玉をオワンに入れ、その数をあてさせるといった他愛ないものである。

▲「コレーツ入レルアル。コレ幾ツアル」

兄の方がしゃべった。すると群衆の中から小僧らしい片づけしから投書したのだ。

おおかたはボツであった。

「二ツアル。今イレタ」

なまぬるい日本語で答えた。彼は種を見付けられたの

とにかく、どの雑誌も少年の投書欲をあふり立てるごとにとつとめ、ぼくはそれに乗せられたというだけではなかったが、その投書一覧をにらんでは締切り日を追つて

片づけしから投書したのだ。

おおかたはボツであった。

である。少年手品師は、二度とそのオワンをあけようとせず、静かに袋の中に入れた。▽

中国人の子どもは、一つの玉を見せびらかしながらオワンに入れた。当然、見物人は一つと答えてくれるつもりらしかった。そのとき、少年はさつと二個を入れたのだが、それは見ていたぼくにも見破れた。そのとき、ぼくには奇妙な動悸が打った。自分がしくじったような、冷や汗が湧く思いがあった。案のじよう、「二ツアル」というヤジがとんだのだ。

そのとき、ぼくはさっきの動悸を忘れて怒った。日本人のくせに、たどたどしいカタコトをマネたことが、とりわけ憎々しく思われた。その小僧は芝居の悪党のようであった。

こんどは弟のほうがドラをたたくのをやめ、突然に胸を張った。

▲「コレ、上手アルナ」

兄がいった。そういった時には、弟の方はさか立ちをしていた。

弟は足をおろして今度は立ったまま、からだをそらして頭を地につけた。

「コレ、上手アルナ」▽

しかし、まばらな見物人は、さらにひとり、ふたりと立ち去るばかりであった。

▲弟の方はくばんだ鐘を一人の男の前へ持つて行って頭を二三度下げた。

「何をッ！」

その男は叫んで、その場を去った。弟は一回りして集めたお金を手品をしている兄に見せた。五六銭、銅貨がはいっていた。▽

兄は一銭一銭、袋のなかへ入れた。

▲そして手品を途中でやめて袋を下げるどこかへ立ち去った。▽

ぼくの幼稚な短文はそれで終わっているが、ぼくがその中国人の兄弟を見たのは、そのときのただの一度だけ



である。ふたりがそれからどうしたかは知らない。

そのときも、トオルさんと見ていた。

弟のほうが、両脚を力いっぱいひろげ、腰に両手をあて、ゆっくり上体をうしろへそりくりかえらせ、ついにその頭が地面に達したとき、ぼくはひどく感心した。

すると、トオルさんが小声で教えてくれた。

「あの子は、毎日、スウのんどるんや」

「ス?」

「スをのむと、骨がやらこうなる」

そのコトバはぼくを刺した。

あのすっぱいスを飲めば、どうして骨がやわらかくなるのか?

それにもまして、少年がそのすっぱいスをクリのようすまなければならないことが、ひどくむごい仕業のように思えた。

ふたりの中国人の子どもが立ち去ったあと、動物園の動物たちがいちように持つ物悲しい毛のにおいが、その場には残っているように感じられた。

ぼくたちは、中国やタイワンや朝鮮やヨーロッパの子どもたち、アルカッシャのようなアビシニヤ人ともなか

よく遊んだ。だが、そこにも一種の軽蔑感を沈めていたにかかったとはいえない。

いつであったか、トオルさんと諏訪山小学校へ登校する途中、下山手通三丁目の同文学校の前をとおりかかつたとき、固くとどされた校門のなかから、キャツキヤツと遊ぶ声があふれていた。

ぼくはなんという気もなしに、電車道いっぱいにまかれている小石を両手ですくいあげ、校門のなかへ投げこんだ。

と、校門がさっとひらかれ、怒号とともに黒い服を着た大集團があらわれ、雨雲のように殺到した。ぼくとトオルさんは一心に走った。

背後の怒号が消えたのは、諏訪山小学校の校門にとびこんだときであった。

この記憶は、いまもぼくににがい。

その日から二十年ちかくのち、日華事変がおこり、ぼくは華北山西省の戦線に投げこまれ、三年間を戦つた。敵の城市を占領するごとに、あのぼくを追つた大集團の怒号がよみがえり、それから少年手品師の声が折りにふれて耳の奥で鳴つた。「コレ、上手アルナ」△つづく△

オール関西

10月号予告



★万国博特集

- ・座談会／外国人の見た日本万国博
- ・各パビリオン案内
- ・180日に挑む人—催物プロデューサー・渡辺美佐
- 故井植歲男三洋電機会長を偲ぶ会
- 好風対話／花柳有洗—高田好風
- 関西の話題・市政50周年を迎えて頭張る特訓明石市長
- ・京阪神百貨店拡張、今たけなわ
- ・大阪に藤村公園を
- ・神戸ガイド特集
- ・関西フォーク界展望

★好評連載企画

- 名作の中の関西・大谷晃一／画家との一時間・石井馨
- ポンソワール・マダム
- ・向井修二の仲間診断
- ・グループ登場
- ・上杉典子の中近東イラスト紀行
- 小説／「若き日の道長」田中あや子
- コラム／マスコミ採点簿・経済・科学・音楽・美術
- 万博の動き
- 関西のすべてをガイドするタウンカレンダー
- ゴルフ・カー・麻雀・競馬／神戸ショッピングガイド
- 神戸百店会ガイド／ニューショップガイド



ハイセンスの紳士服で最高のおしゃれを！

三恵洋服店

元町4丁目 TEL ④ 7290



あらゆる体型に
フィットする
お詫えシャツ



紳士洋品の店

千秘庵

元町4 TEL ④ 6959



Mr. Kent
came to Kobe
流行に左右されない
本来のオシャレ
それがKentです
シックな
スコッチ風の店舗
それがFunakiyaです

オシャレ洋品の店

フナキヤ

元町3 TEL ④33 3617



高級紳士服専門店

神戸テーラー

さんちかメンズタウン TEL ④0388
生田区北長狭通2(阪急西口) TEL ④2817-3173

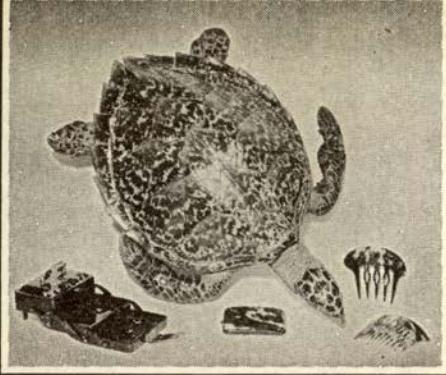


創作ハンドバッグ
工芸品 ORIGINAL

神戸■元町
ACCESSORIES

イクシマヤ

TEL. (33) 2415・2416



センスあふれる
べっ甲専門店

太田鼈甲店

元町1丁目 TEL (33) 6195

アクセサリーの店
モザ

神戸大丸前
TEL (39) 9719



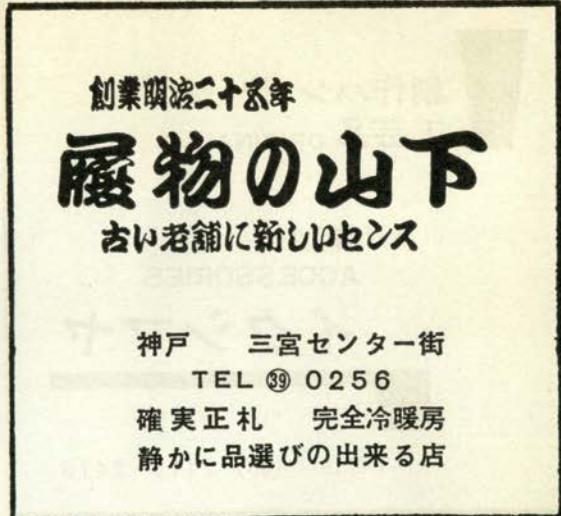
高級
ハンドバッグ

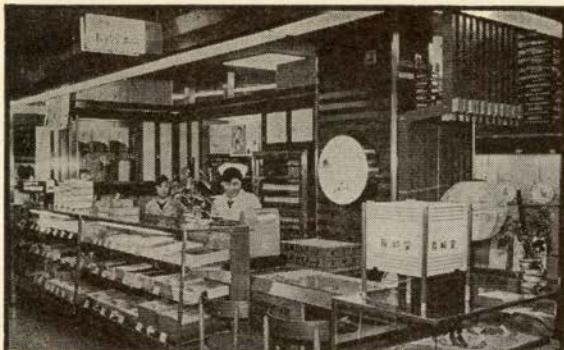
海外旅行用
大型トランク
航空 鞄



いなみ 大上鞄店

神戸元町1丁目 TEL (33) 3962-4
さんちかメンズタウン・ポートタワー
大阪千日デパート1階





ご贈答に風味豊かなカステーラ
長崎堂本店

本店=大橋町5 大五ビル (61) 0553-4
新開地店=松竹座前 (56) 2 4 2 3
元町店=元町6 (34) 4 1 3 0
さんちかスイーツタウン (39) 3 6 2 5



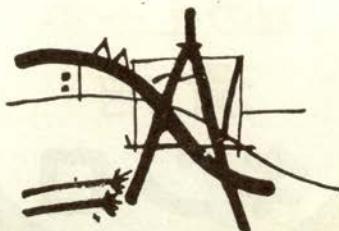
神戸三宮トア・ロード
本店 33-0001
電話 南店 33-1616
さんちかスイーツタウン
電話 33-6532



コスモポリタン
チョコレート・キャンディー

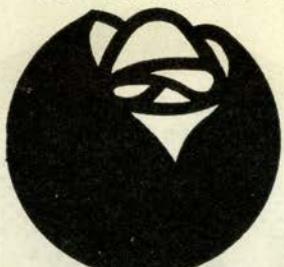
神戸本社 神戸市生田区三宮町1丁目170 電話 33-5304
神戸直売店 神戸市生田区三宮町1丁目 電話 33-1217
大阪堺筋店 大阪市東区淡路町2丁目 電話 231-6979
大阪心斎橋店 大阪市南区安堂寺橋通4丁目 電話 251-4182
東京銀座店 東京中央区銀座8丁目 電話 571-2303
東京新宿店 東京都新宿区角筈1丁目
新宿ステーションビル地下2階 電話 352-2436
東京有楽ビル店 東京都中央区有楽町 有楽ビル 電話 213-2821
東京国際ビル店 東京丸之内 国際ビル 電話 212-3746

額縁絵画・洋画材料
室内工芸品



末積製額 三宮・大丸北
トア・ロード ④31309・6234

神戸っ子のみんなに愛される落ちついた喫茶店



TEA ROOM

ai 喫茶 愛

★神戸・元町本通元一ビル2階 TEL (32) 0958

本店 大丸前・三宮神社東
TEL (33) 55772
5 6 7 4
(毎週水曜日休み)
支店 さんちか味のれん街

おすし
てんぶら



榮彌



営業時間
A.M. 11.30~P.M. 9.

色・味・香り
三つ揃った
灘の生一本
清酒
キンロ

■神戸市東灘区魚崎町魚崎356
金露酒造株式会社

でんわ・
232333
一一三七七一
一〇六三四四
一一〇六三五

やつぱりうまい
むさしのとんかつ



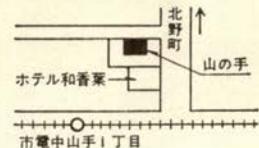
グラムール

生田筋・岸ビル地階 TEL 33-4637



SNACK YAMANOTE

神戸市生田区中山手1丁目
ソネビル TEL 22-3637



スタンド

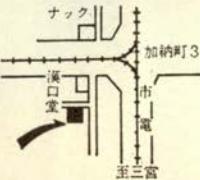
ばんびー

神戸市生田区下山手1丁目6の5
東新ビル地階 TEL 39-8734



JAZZ BOX Candy

神戸市生田区加納町3丁目2
TEL 33-3371



夏の別れ

石浜みかる
え・石阪春生



昼食時の職員室前は、この日貼り出された一学期末考査の成績表に見入る生徒でざわめいていた。

「がんばったね」

松木の表情は明るく、嬉しそうでさえあつた。

「まぐれよ」

「こうなつたら、書記どうしてもやつてもらいたいな」

松木の言葉に小首をかしげながらも、胸の異常な昂ぶりはどうしようもなく、私の中で何か解放的思いがぐん

ぐん拡がつていつた。
「松木さん、どうして調さんんたのまないの。一番ふさわしいわ、あの人が。成績は私のような気まぐれじゃないし、クラスの世話をよくしているわ」

私たちは黙つて、薄暗い階段を登つた。
「判つた」

★前回まで 旧制中学の「質素剛健自重自治」の伝統をもつた名門校に入学した城崎さち子の周りには、はや大学受験にあくせくする級友たちがいた。ある昼下り、成績掲示板の前で一番の成績を維持しているサッカー狂の松木清之との出会いが、さち子の心を揺るがせた。
そんな時、生徒会長に立候補することを決めた松木から、書記になつてもらいたい、といわれるが、さち子は暗に調笙子の名をあけて松木から離れた。

松木はちょっと立ちどまり、私の方に頷いた。その声は柔かく、寛容な響きを持つていた。この人は私のことをすっかり理解していくくれているのだという思いが、私の中で、急速に拡がり、溢れていつた。

「ごめんなさいね」

私は素直になり、松木は、黙つたまま白い歯をキラリと光らせた。

開票が終って夏休みまで、あと一週間しかなかつた。

その間、松木と他の役員たちは事務引き継ぎに忙殺されていた。それを見ながら、私は取り残されたような寂しさと、笙子に対する妬ましさを憶えた。その妬ましさには、入学早々の和子の件以来、笙子の本体をいさか見誤っていたのではないかという不安がいつもつきまとつていた。それゆえ、廊下で、ユーカリの樹の下で、スタンドで、悪臭の湊川の傍で、多忙な松木と交す五分、十分の立ち話が私にはほどく貴重な宝のように思え、別れたあと、その言葉をいくたびも反芻した。短かい時間の中の凝縮された会話の濃密さを思い出すだけで、私の体は熱くなることさえあつた。

夏休み開始後の十日間を、私はある外人家族とともに瀬戸内海の島で過した。

神戸の西の外れにあるジェームス山は外人たちの居住地で、私は月に二回、そこにあるY家で四人の子供のベビーシッターのアルバイトをしていた。それは勿論、英語の勉強をかねてのことであつた。

Y氏は父の仕事の関係の知り合いだった。Y氏が支店長をしているP汽船の新造船が、父のつとめるK造船のI島造船所で間もなく進水することになつていて。Y氏はその都合もかねて、休暇をI島で過す計画を立てていたが、私も同行しないかと誘つてくれたのだった。

I島は、K造船差し回しの純白のランチで尾道からそう遠くはなかつた。提供された洋館は、町からかなり離れた山の中腹にあり、距離をおいて、海近くに点在する白く塗りをかむつた農家をハイゲイするように建てられていて。表からは三階建、裏からは二階建の赤屋根の建物で、家の裏は山の斜面になり、松林が頂上まで這いつばつていた。

日常性から隔絶。そんな感じの中に明けくれる生活が、最初の日から、私にはほどく快適に感じられた。

夕凧が去り潮風が再び心地よく頬を撫で始めるとき、島々は、落日の海にシルエットになって浮ぶ。やがてその

島々には白い灯がポツポツとつきはじめ、泳いで渡れるのではないかと思えるほどこちらへ近づいて来る。

夕食が済んで、四人の子供たちを寝かしつけたあと、私たち、Y氏と夫人と私は、くつろいで酒を飲んだ。自分が酒に強いのだと知つて驚いたのもあの時だった。

Y氏は三十六、七歳で、典型的なアングロサクソンの容貌をしていた。視線があうたびに、彼は碧い眼に人なつっこい微笑を浮べる。あの淡い金髪に一度指をすつと通して梳いてみたい。私はなんだかそう思ったことがあつた。

夫人はY氏の肩にもたれ、濃い栗色の髪を彼のもとてそぶのにまかせながら、窓の外を流れる小舟の灯に見入つていた。小柄な体に、その栗色の髪が長い。見開くと黒眼がちな瞳に、どことなくラテン系の血が混っているのが感じられた。

日になんとか、私は居間の窓から、様々に色を変える海と、点在する島々と、そして海に続く空とを飽かず眺めた。そんな中で、気づかぬ中に、私の住む町は遠くなつていただろうか。松木からの絵葉書を受けとつたとき、ここに来てもう五日もたつていてことに気付き、私はほどく驚いたものだつた。

絵葉書には、ありきたりのことしか書かれていないなかつたが、最後に、二行ほど、お元気ですか。あなたが来られなくて残念です。笙子。と書き添えてあるのを眼にしたとき、私はなぜか眼がうるんでくるのをどうしようもなかつた。

私が自分自身の奇妙な分裂と結合を味わい始めたのはその翌日からであった。

突然両肩をぐぐつと押えられ、虚をつかれた私は、塩辛い水を勢いよく飲み込んだ。一回転してようやく水面に顔を上げた私の眼に、眼尻に深く皺を寄せたY氏のひどくいたずらっぽい顔が飛び込んできた。私はY氏がいつもランチから水へ潜ったのか、全く気付かなかつた。Y



HISHISAKA

氏のいたずらっぽい笑顔に、私は今までになく強い親しみを憶えた。どうにか呼吸ができるようになった私は、なんとかY氏にも同じ思いをさせてやろうとしたが、Y氏の体も泳ぎも私の手におえる代物ではなかった。いさぎよくあきらめ、私はY氏と並んで岸までゆっくり泳いでいた。山影を映して、青緑に透き通った水は、海水浴客の蹴り上げた白砂で、うっすら濁っていた。

ランチの上では西瓜が割られ、K造船の若者たちが四、五人、暇やかに騒ぎながら、もうはうぱり始めていた。一片の西瓜に氷のかけらを数片突きさし、私は水の中のY氏に手渡した。

「とても親切ですね」

「いいえ、どういたしまして」

体からしづくを垂らしたまま、私は船べりにもたれ、ほとんど種のない、まるで人工甘味料を注射したような、真赤な西瓜を口に運んだ。

突然抱きあげられた。Y氏だった。自分の体がこんなにも軽々と持ち上げられたのに驚くと同時に、笑いざなめく周りの若者たちを強く意識しながらも、私は、Y氏

のいたずらっぽい笑顔に、私は今までになく強い親しみを憶えた。どうにか呼吸ができるようになった私は、なんとかY氏にも同じ思いをさせてやろうとしたが、Y氏の体も泳ぎも私の手におえる代物ではなかった。いさぎよくあきらめ、私はY氏と並んで岸までゆっくり泳いでいた。山影を映して、青緑に透き通った水は、海水浴客の蹴り上げた白砂で、うっすら濁っていた。

ランチの上では西瓜が割られ、K造船の若者たちが四、五人、暇やかに騒ぎながら、もうはうぱり始めていた。一片の西瓜に氷のかけらを数片突きさし、私は水の中のY氏に手渡した。

「ドウモ、スマセンネ」

日本語で謝り、再び私をかかえ上げながら、「こんな頑固な娘は見たことがない」Y氏は私の耳元で囁いた。

「私も見たことがないわ」

秘密めいた冗談のよう、私も囁き返し、冷えた体を温めるために海に飛び込んだ。私は深く水に沈み込みながら、空高く飛翔するような自分を感じた。

夕方、ランチは、あくまで穏かな落日の中に金色の波をたてながら帰路についた。

私の心は、静かに昂ぶり始めていた。私はそれを知りながら無視しようとしていた。それでながら、Y氏との顔を合わせたびに、私の瞳は

うるみ、私の頬は意志に逆うのだった。松木のことが私から去つてしまつたわけではなかった。だが、あの絵葉書に、「お元気ですか」と笙子に書かせた無神経さのゆえに、Y氏とのことで意志に逆う自分の肉体をとがめる気持にはならなかつた。

二日のちY氏は、ほとんど出来あがつた船の関係者を数名、洋館へ客として迎えた。その晩私はゆかたを着た。紳士として幾分か恰好がつく上に、あの木綿の感触が、私は嫌いではなか

つた。

晚餐のあと、皆はソファに座を移した。役目を終え、私もそのひとつに腰をおろしたが、息苦しさが波のように押しよせ、グラスを持つ手は膝の上でひどく落ち着かなかつた。私はY氏と視線がぶつかるのを注意深く避けた。私が眼を向けさえすれば、あの眼尻に深く皺のよる碧眼がすかさず微笑みかけてくることは判つていた。そして、Y夫人はそれを充分承知しているかのようであり、それでいて決して微笑みを絶やさなかつたから。

客を送り出すときに、Y氏は長女と私を誘つた。海岸通りに駐めてある車のところまで、私達は石段を下つた。車が走り去つたあと、月明りの中でY氏は娘と私の肩をその大きな手で左右に強く抱き、「イチ、ニ、イチ、二」と、はしゃいだ若々しい掛け声をかけながら、狭い石段を足ばやに登つた。十歳の娘は快活な細く透つた笑い声をあげた。

★神戸の催し物ごあんない★ <10月>

<音楽>

★エッシャンバッハ ピアノ独奏会

10月3日(金) PM6:30 曲目/モーツアルト「ソナタヘ長調K.332」「ソナタ変ロ長調K.333」
ジューマン「間奏曲O.P.4」「アベック変奏曲O.P.1」
入場料 ¥1,500, 1,200, 900, 600 (芸術祭特別料金)

兵庫県主催 於神戸国際会館

★坂本スミ子と東京キューパンボーアイズ

10月6日(月) PM6:30 曲目/「マラグーニヤ」「グラナダ」「タブー」「五木の子守唄」ほか民音10月例会
会費 ¥520 於神戸国際会館

★オペラ「椿姫」(総天然色映画)

10月8日(水) PM6:30 出演/ローマ歌劇団、管弦楽団 合唱団 バレエ団 アンナ・モッフォ 主演指揮/ジユゼッペ・バターノ 監督/マリオ・ランフランキ



入場料 S¥1,300 A¥1,000
B¥800 (学生¥500) 神戸新聞会館主催 於神戸国際会館

★森進一リサイタル

10月13日(月) PM3:00 6:30
曲目/「年上の女」「港町ブルース」「花と蝶」ほか
入場料 S¥1,300 A¥1,000 B¥800
神戸新聞会館主催 於神戸国際会館

<デューク・エイセス

10月14日(火) PM6:30 曲目/「ダニーボーイ」

「ある恋の物語」「サニー」「女ひとり」「いい湯だな」「別れた人」入場料 S¥800 A¥650 B¥500

神戸新聞会館主催 於神戸国際会館

★魅惑のピアニストカーメン・キャバレロ

10月15日(水) PM6:30 レパートリー/「愛情物語」「モア」「トナイト」「禁じられた遊び」ほか
民音10月例会 会費¥750 於神戸国際会館

<演劇>

★文学座公演「阿Q外伝」

10月17、18、19日 PM6:15 作/宮本研 演出/木村光一 出演/杉村春子、北村和夫ほか 神戸労演10月例会
会費¥600 於神戸国際会館

<舞踊>

★ロイヤル・フェスティバル「白鳥の湖」(全幕) <写真>

10月21日(火) PM6:30 出演/ロンドン・フェスティバル・バレエ団/入場料 A3,300 B2,800 C2,500

D2,200 E1,600 F1,000

兵庫県主催 於神戸国際会館

★牧創作舞踊研究所 劇団アトロ・パン合同公演

10月26日(日) PM12:30 6:00

第I部 創作バレエ・リサイタル

第II部 アーチー・ローレンツ作「旅情」

入場料 ¥300 於神戸国際会館

<演芸>

★東西浪曲名人大会

10月3日(金) AM11:00 PM4:30
出演/浪花家辰造 森田 実 中村富士男 天光軒満月
王川勝正ほか 特別席¥1,000 一等席¥800 二等席¥600
神戸新聞会館主催 於神戸国際会館

Y氏の手が私の脇の下に差し込まれていた。

私の体を支えるため素肌の乳房に触れていた指に驚き、私は反射的に体をすらせた。Y氏の指も一瞬の戸惑いのあと、すっとそこを離れた。

私は身ハツロの存在をまったく忘れていた。小憎らしい場所にある絶妙な窓。偶然は、ひどく新鮮な驚きだった。体中を突き抜ける痛みにも似たもの。動悸。私はY氏に気付かれないように、歯をくいしばって、余韻を味わつた。

その夜、私はなかなか寝つけなかつた。あとから横のベッドに潜り込み、早々に寝ついてしまつた長女の、いつものように掛シーツからはみ出した、まだ幼さの残つた裸の白い下半身に、窓から深くさし込んだ月の光が、やわらかな影を描いていた。私はその幼い体を見つめながら、松木のことを思い出していた。私の中で薄れかけていた松木の影は、そのやわらかな影よりもなお淡いものに変わつてしまつていた。

△△△△△



柏嘉嘉金大小小岡岡牛上榎石井石乾沙青荒浅朝安
曾上比
井納納井淵野根崎部崎尾田並野野木木田奈部
文
健毅正元ツ一真伊真吉将正成左信豊重長正
都衛
一六治彦ム夫遣忠子一朗雄一明門一彦仁雄晃平隆夫

玉田田田滝滝竹角砂塩新白雀坂阪古後上小小小小
井中中村宮川川中南田路谷川部口本林藤林林泉林磯

健寛孝虎勝清 猛重義秀 昌干 喜末英秀徳芳良
一之 操郎次介彦二一郁夫民孝雄渥介雄勝渠二一雄一夫平

神行山若百村宮宮松福深原煙原野南中中西直外竹津
戸
青吉口杉崎上地崎井富水 口沢部西巻脇木島馬高
年
会哉泰 反正襄辰高芳惣泰專忠幸圭 太健準和
議 一次二 二
所女弘慧雄郎二雄男美吉良郎郎三勝弘親郎吉助

★月刊神戸「っ子」を毎月お読みになりたい皆さま、また神戸を離れているお友達に、神戸の番りをおとどけになりたい方は、編集室あてにお申込み下さい。さっそくお送りいたします。

生きる若者でありながら何と云うことを云ふか。死とは人間に残された最後の余地ではないか。私は20才。人が死ぬ時に至る迄の過程を知る由もないが、死をカツアムトの時は現実に死を向けない、見ようともしないからだ。私は生きよう／＼尼崎（斎藤マキ）★今度新しく「神戸のうまいもんとドリンク」の地図がつくられたこと感激です。切り抜き、持ち運びに便利でいつもボクの手には持っています。ところで、ちよつと歩いています。そこで、気付いたのですが、あの地図にはまちがいがあります。もう一度よく確かめてみて下さい。

の優勝戦の時に味わったあの興奮も、覺めをならぬうちに流れやう。あの日、球場を埋めた大観衆の熱気があふれた限りない声援も、また人を、時を変えて球場を埋めることだらう。

★ 空空に建つ貿易センタービルの完成間近か。有岡助役の急死、原口市長の六選断念と、市長選挙を迎えて新たな展開がくりひろげられそう。

いゝとホンマに思った。ネコロジストの先生を見るに、猫好きの精神古さをもつてゐる。ナントシャンと三つ懸けの御古物としているわが身がうらめしくなつた。ニャンよ許せ!「小泉美喜子」★飽くことなく雌を追いかけのヶ月の容姿と生殖能力に驚嘆し、美と程遠いところで離れてゐる心しみを味わうと打たれた。自然の規律を

発行にいたりなどお世話をいたいたいの方がた

神戸一子さん



1年分
6ヶ月分
（送料共）
月刊神戸っ子に紹介され
ている、神戸の銘店には、お客様
までのサービスとして神戸っ子がお
かれています。
月刊神戸っ子をお求めの時には
左の本屋さんへどうぞ。
コウベブックスさんちかタウン
漢口堂・三宮店
京町筋